青少年育成センターだより

第１６３号　２０２３．７．１５

防府市教育委員会生涯学習課
青少年育成センター
０８３５－２３－３０１３

心を寄せる（４）

世界では、紛争が続いたり、大地震が発生したりするなどして、家をなくし、難民となる子どもたちがたくさんいます。その多くの子どもたちが学校に通えない状況です。その子どもたちの状況がＵＮＨＣＲ（国連難民高等弁務官事務所）の広報誌に、記載されていたので紹介しましょう。

○　ヤルダさん（８歳）はアフガニスタン・カブールで避難生活を送っています。ヤルダさんは勉強を続け、将来は医者になりたいという夢を持っていました。しかし今アフガニスタンでは、女の子は小学校６年生を終えると学校に通うことができません。２０２１年のタリバンの復権以降、様々な制約が少女と女性の希望や夢を奪ってきました。女子の中学校のほとんどは閉校となり、多くの女性は職を失いました。家族はさらに貧困に陥り、結婚を強制される少女もいます。

○　「村に火がつけられるのを見ました。銃声と恐怖で心臓が撃たれたようでした」巧みな手話で、２０１８年のミャンマーでの恐ろしい迫害を説明するハッソンくん（１３歳)。耳が聞こえず話をすることができない彼は、激しい戦闘の中を命がけで逃れ、バングラディッシュへたどり着きました。母親を失ったハッソンくんを育ててきた叔母は、障がいを持つ彼が周囲から理解されず、苦しんできたのを知っています。それでも、今彼は学習センターで読み書きを覚え、友人に写真の撮り方を教わり、写真を撮るようになりました。現在この難民キャンプでは、障がいを持つ子どもは公式の教育を受けられません。彼は手話で訴えます。「世界の人々に僕の写真を見て、僕たちの苦しみを理解してほしい。教育を受けたいという強い願いを知ってほしいのです」

○　ウクライナへの侵攻が始まってすぐ、ソフィアさん（１３歳）は両親を故郷に残してバスを乗り継ぎ、１４時間かけて国境を越え、祖母の暮らすポーランドへ避難してきました。祖母がソフィアさんの勉強のために、そして自分が働いている日中、孫娘が安全に過ごせるように学校を急いで探しました。ソフィアさんは今、ポーランド語の話せない難民を受け入れる学校に通っています。「最初はほんの２，３週間の避難と思っていました。でも、もう永久に戻れないかも、と思うようになりました」と彼女は言います。ウクライナでは数千校の学校が破壊され地雷等の危険もあり、多くの親が危険を恐れ子どもを学校に通わせていません。また、ウクライナから隣国に逃れている子どもたちの３人に２人が、言葉の壁など様々な問題を抱え、学校に通っていません。

今、世界には学校に通いたくても通えない子どもたち、人のために役立ちたいという夢を持っていてもその夢を諦めなくてはならない多くの子どもたちがいます。

「自分には関係ない」ではなく、いつも心の中に置いておきたいものです。そして、そんな子どもたちがいるということをあなたの子どもに話しましょう。そうすることにより、困っている人に寄りそえる心優しい子ども、世界に目を向けることができる子どもに育つのだと思います。

文責＝青少年育成センター指導員　藤村